

待降節第2主日 マルコ1:1~8

「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」という、洗礼者ヨハネの言葉は、第1朗読のイザヤ書40:3節から取られています。この箇所を背景を少し説明しますと、紀元前6世紀、バビロンで捕囚されていたイスラエルの民は、エルサレムへと還させる時に、神様が特別な近道を通されました。普通はユーフラテス川沿いに北上するルートを使うのですが、神様は、民を慰めるために、荒野に広い道を通して、まっすぐ西に進ませる道を作って、早く帰国させたことを意味しています。

福音では、同じ「主の道を整える」という言葉が使われていますが、意味合いが違ってきます。バビロンからエルサレムと言う場所から場所へと移動する「道」のことではなく、信仰の「道」になります。「信仰の道」がでこぼこになっているからそれを「整えなさい」と言っています。「整える」と言うには、神様から離れるものを取り去っていくことです。プライドだったり、名誉欲、ねたみだったり、そういったでこぼこしていたものを、取り去って神様に向けてまっすぐになっていくことです。

先週の待誕節黙想会では「へりくだることこと」の大切さを学びました。「神様なしで間に合っている、という傲慢な心ではなく、幼子の心で祈りなさい」とフランシスコ教皇は言われていました。このことをどう理解したらいいのか？ 昨日行われた幼稚園の劇が教えてくれました。

「大きなありがとう」というお話です。あらすじをご紹介します。

ウサギが森の向こうから、原っぱに、花をつみに行きました。途中、川までくると、カワウソが水から顔を出しました。「何しているの？」とウサギがきくと、「魚をたくさん獲って、お母さんにありがとうを言ってもらうんだ」とカワウソが言いました。「私も昨日、お母さんにありがとうを言ってもらったよ。耳についた草の実を取ってあげてね」とウサギが言うと、カワウソは威張って言い返しました。「そんなのちっちゃなありがとうだよ」それを聞いてウサギはびっくりしました。「知らなかった。ありがとうに、大きいのと、小さいのがあるなんて」

その後、ウサギは他の動物たちが活躍して「大きなありがとう」を言ってもらえてるのに、自分は大きなことができない、とがっかりしていきます。 どうやったら「大きなありがとう」を言ってもらえるか？ 考えて悩みます。

帰り道、きれいな花を見つけて摘んでいきます。すると、さっき「大きなありがとう」を言ってもらっていた動物たちに出会います。動物たちが「そのお花ちょうだい！」「こんなお花で、自分を飾ったことなんてなかった、ありがとう」と言ってもらいます。次々と「ありがとう！」と言ってもらったので気づきます。「あれっ！ 今 いっぱい ありがとうを 言ってもらえた。きっとこれは大きなありがとうなんだ」

この劇でドキッとしました。私は「そんなのちっちゃなありがとうだよ」と傲慢になるカワウソと、「自分は大きなことない」と卑屈になるウサギを、行ったり来たりしているように感じたからです。「自分は大きなことない」と思っているながら「大きな結果」を望んで苦しんでいることに気づかされました。人のことを羨んで、神様から与えられているタレントや立場に不満を持っていました。

劇で子どもたちは、与えられた役になりきって体全体を使って演じていました。その姿に心が柔らかくなりました。待降節、自分を縛っている考えや、デコボコをならせるように願ひましょう。神様がいらしてこそ、自分の毎日があることを悟れるように願ひましょう。